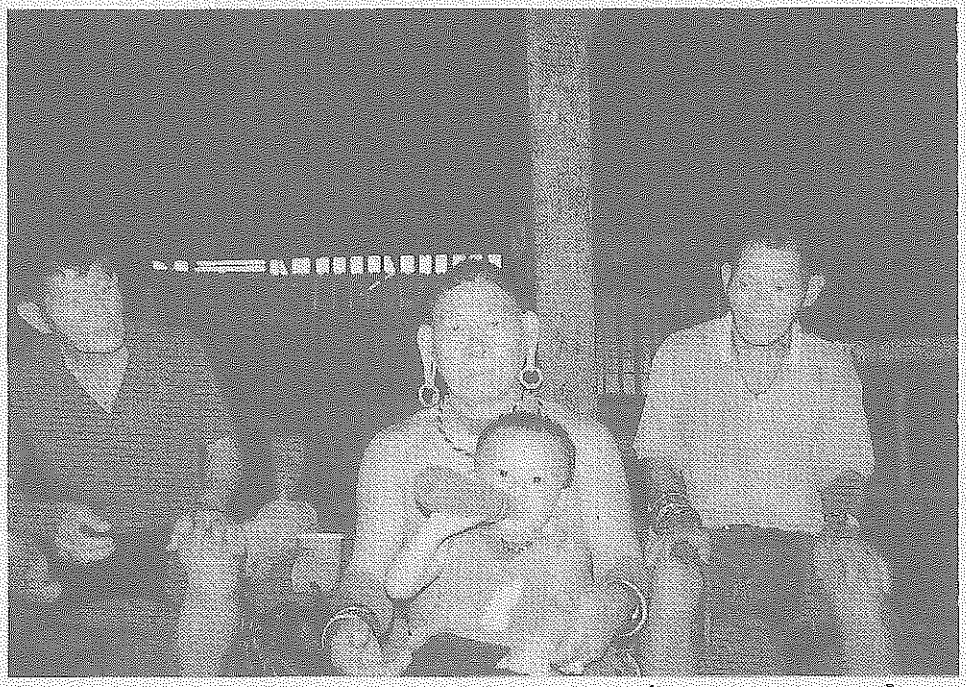
Save The Tropical Forests

ウータン

Hutan 80

森の通信 2006.6.27



〔カラワク奥地のプナン人たち▲〕

CONTENTS

- 「やれば出来る！ラミン材・違法材停止キャペーン ⑪ …… 4P
- インドネシアの紙製品～RR弾 …… 6P
- 「パーム油は環境にやさしい」と言わないで！… 8P
  ―― ライオンCMに対して ――
- ボルネオ島を行く（最終回）…… 10P
- 世界の森林ニュース … 14P

夢の「キナバル」登頂記を出版

——ボルネオ島の世界遺産・4095メートル——

元本社記者の藤田健次郎さん 自然保護への取り組み交え

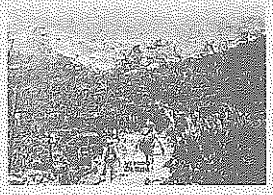
40歳を過ぎて本格的に山登りを始めた元毎日新聞編集委員、藤田健次郎さん(67)＝富田林市在住＝がマレーシア・ボルネオ島にそびえるユネスコの世界遺産、キナバル山(4095メートル)に50代と60代で計2度登頂した経験を著書にまとめ、出版した。

タイトルは「初めての四〇〇〇メートル 熟年登山者のキナバル山行記」＝写真。藤田さんは四天王寺国際仏教大非常勤講師を務めるかたわらで、国内外の山を歩く。山ろくまで90キロの都市、コタ・キナバルまで関西国際空港から直行便で5、6時間と海外の高峰にしては比較的近いこともあり、「富士山よりも高い山に登りたい」という夢を実現させた。

単なる登山日記にとどまらず、国立公園になっているキナバルの管理、整備が行き届いた様子、登山家のマナーの良さを「荒れ放題」とも言える日本の山と対照して書いた。山頂近くに美しく清掃されたトイレがあり、ごみ一つ落ちていないと言っても過言ではない頂上までの道「サミット・トレイル」。ごみを捨てたことを現認されると罰金を取られるという制度も自然保護につながっている。

登山口から間もなくの密林地帯。壮絶なスコール。1500種類の自生ラン。多数の奇岩に大岩塊地帯。キナバルは中高年の登山愛好家のロマンをかきたてる。山と渓谷社刊。1500円(税別)。

【富村洋一】



(毎日. 6/18)

【ウータン活動報告】

2006・3・22　『「やれば出来る! 違法材ラミン材使用停止」(完全編)と新規違法材調査を』報告書入稿

3・30　『「やれば出来る! 違法材ラミン材使用停止」(完全編)と新規違法材調査を』報告書完成

4・4　通信「ウータン 79 号」発行

4・10　アースデイ大阪、第９回会議へ参加

4・21　アースデイ大阪、第１０回会議へ参加

4・29　アースデイ大阪開催、参加

5・28　ウータン、ラミン調査会合同会議

5・31-6・5　西岡、シンガポール、マレーシアの約３０社にラミン使用の停止依頼・調査

6・10　廃棄物学会で講演、西岡

☆ジャワ島地震災害へのご寄付のお願い

世界のFoE(Friends of the Earth)メンバーであるWALHI(FoE Indonesia)が5月27日早朝のマグニチュード6.2クラスの大地震により被災した人々の緊急支援を始めています。6月3日現在、死者6千人、けが人4万人と報じられており、大災害の緊急支援活動には多くの資金が必要とされています。

FoE Japanでも、少しでも多くの被災者の方々へ支援の手が差し伸べられるよう、皆様のご寄付・ご支援をお願いしています。ご寄付いただいた支援金は、FoE Japanが責任を持って、現地のWALHIに届けます。

皆様の温かいご支援、ご協力をお願いいたします。

●募金方法は郵便振替にてお願いいたします。
郵便振替 00130－2－68026 FoE Japan
＊通信欄に「ジャワ島支援募金」とご記入ください。【問合せ】 国際環境NGO FoE Japan 担当:三柴
TEL 03-3951-1081 FAX 03-3951-1084 email mishiba@foejapan.org

【共同呼びかけ団体】
国際環境NGO FoE Japan
ウータン・森と生活を考える会
地球の友・金沢

※以下は、5月27日発生当日に現地から世界のFoEメンバーに送られたメールの抜粋です。
***** ***** *****
世界のFoEメンバー各位

今朝5時:50分、マグニチュードM6.2の大きな地震がジョグジャカルタ地域を直撃しました。震源地はジャワ島南方で、被災の深刻な地域はバントゥル(Bantul)、クラテン(Klaten)県、およびジョグジャカルタ中心部です。1736名が家屋の倒壊等により命を失い、さらに大勢の人々が重軽傷を負い、沿道の救命テント、サルジト(Sardjito)やベセスダ(Bethesda)病院で手当てを受けています。大勢の人が家を失い、また倒壊を免れた人々もいつ二次被災を恐れ、家の外で夜を過ごす生活を強いられています。

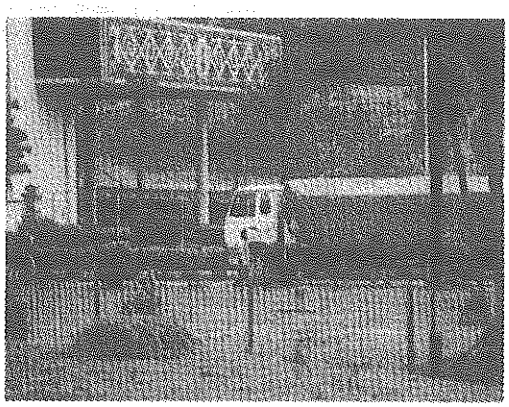
インドネシア最大のNGOであるWALHI(インドネシア環境フォーラム)は中央ジャワ、東ジャワ、およびジョグジャカルタの各地で、緊急被災者支援をしています。
現在、必要物資購入、輸送、人員確保など基本的な支援体制準備費用が不足しています。WALHIでは、ジョグジャカルタ地震緊急支援ポスト口座を開設いたしました。 是非、皆様の温かいご支援をお願いいたします。
ヘルフィ・リスティアニ(Helvi Lystiani(Estee) Manager for Resource Raising and Mobilisation,
National Office, Jakarta Indonesian Forum for Environment (WALHI-Friends of the Earth Indonesia)
Tel: +62 21 7919 33 63-65 / Fax: +62 21 794 1673 mailto: estee@walhi.or.id

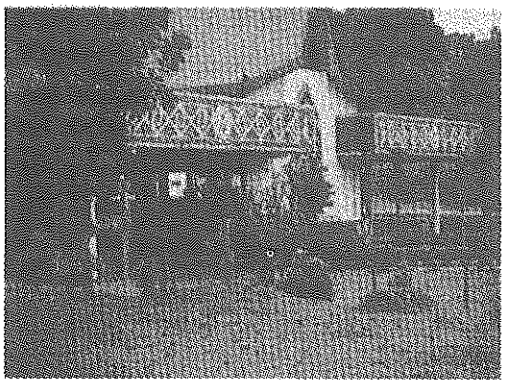
*** 【補足】(2006年6月５日) ウータン事務局から第1回目の支援金を送ります、会員の皆様、支援金をお送りくださるならＦＯＥジャパンへお願いします。(事務局)

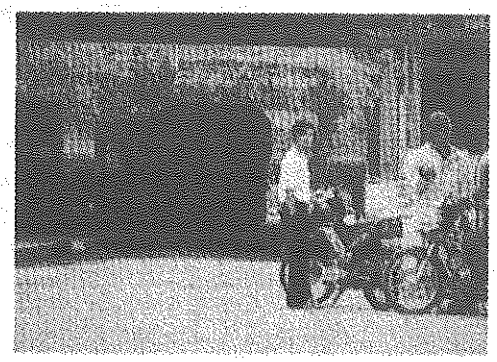
《やれば出来る！ラミン材・違法材停止！国際キャンペーン⑪》《密輸材・張付き調査》インドネシア

Entikong・国境で検査「No チエック」！

西岡良夫







【No チエック!! エッ、全部の車が無検査】

インドネシアの西カリマンタンとマレーシアのサラワク州の間で、違法取引の検査が正しく行われているか確認するため、2005年 10 月 16－17 日の両日、西カリマンタンの Entikong(エンチコン)と手前の町で《密輸材・張付き調査》をウータンとインドネシアNGOの Telapak で実施した。

国境ゲートが早朝5時半に上がる前の午前3時半に15台のトラックやバス数台、乗用車等がゲート前に並んでいた。

午前5時になっても、国境ゲートが上がる5時半になっても、国境の検査員はトラックの幌や乗用車のトランクを開けない。持ち物検査なしでインドネシア西カリマンタンからマレーシア・サラワク州へ通過させていたのだ。次々トラック、バスがやって来たが、同じく検査なしで車を通過させていた。この写真である。

（右上から）

① 午前７時、インドネシアからの木材トラックがチエックポイントへ入る。

② 国境入管で通行料を払うが、入管はトラックの幌を開けず！

③ 通行料を払い、すぐにマレーシア・サラワクへと行ったトラック

朝３時半からエンチコン（Entikong）の町で場所を次々と変えて、密輸状況を確認。西カリマンタンのＮＧＯによると、「入管付近は木材企業がかなりの多くの人に賄賂をつかませているので、気をつけること」と言われていたので、周りの状況を見て、場所を移動したのだ。

12 時前はトラックの台数が減り、ほぼ１時過

ぎでマレーシアへのトラックが減る。これは、マレーシアのシブ、クチンなどの木材工場へ運ぶには4時間以上かかり、木材工場が午後5時で終わるからだ。

ゲートが閉まる午後5時前には、サラワク州から逆に、次々とトラックなどがやってくる。

エンチコン（Entikong）から私たちは、同じルートを通過する宿泊場所の近くでコーヒー・ブレイクしていた。

ちょうど日が暮れて夕食後の午後7時。何とゲートが閉まっている筈なのに、サラワク州から1台の空荷トラックが国境から下ってきた。

「あっ、サラワク州木材企業のトラックだ!」と Telapak **のヤヤット氏。**

午後5時にゲートが閉まり、なぜトラックはインドネシアに入国出来たのだろうか?

午後8時から続けてエンチコンから下った町で《密輸材・張り付き調査》を継続する。午後9時と10時、1台ずつマレーシア・サラワク州のタブドゥ**-エンチコン**国境チエック・ポイント以外の方面へ行く中型トラックが木材を積んでマレーシア・サラワク州のほうへ通り抜けた。当然、国境のゲートが閉まっている。

【密輸は楽々！　入管無しの道路も経由】

翌朝の午前1時半まで丸1日、寝ずに交代で《密輸材・張付き調査》を行った。

その次の早朝、今度はチエック・ポイントのないサラワクへの抜け道をバイクで行く。2時間ほどかかり、マレーシア・サラワク州国境へ抜ける道には、木材トラックの通行した跡が雨降り後のため明らかに付いていた。どちらもサラワク州シブ、タンジュン・マニス、クチンへ運ぶものだ。

西カリマンタンのNGOの情報によると、

「毎日50台前後のトラックがインドネシア国境の山を越え、マレーシアに運搬している。ルボック・アントゥ付近の地域にある製材工場は、マレーシア州企業の1つであるハーウッドの関連もある」と言う。加えて、

「インドネシアの西カリマンタン州とマレーシア・サラワク州の間に5箇所の通行検査のチエック・ポイントがある。しかし、インドネシアから国境の通行検査のない道路は最低で7ヶ所もあり、中型トラックでマレーシア側へ運び出すこともできる。合計12ヶ所の陸路を通ることは容易であり、細い道や川沿いに木材を運び出せば100ヶ所近くになる。全てチエックされずマレーシアへ運び出される。

インドネシア・カリマンタンで操業している木材企業のうちかなりの企業がサラワクの資本なのだ。だから、マレーシアに密輸するのだ」と指摘した。

このように、2005年秋も違法材がマレーシアに輸入されている。2004年12月、インドネシア政府とマレーシア政府が、カリマンタン－サラワク州の違法取引の停止へ強化すると明言したにもかかわらず…。

明らかに、インドネシア西カリマンタン州とマレーシア・サラワク州では、国境のチエック・ポイントで通過検査をせず、違法伐採木・違法取引を見逃し、密輸を野放しにしている。その上、抜け道を通過する密輸も続いている。証言どおりだ。

このように入管を経ての違法取引・密輸、チエック・ポイントを経ずに抜け道を通る場合も、インドネシア・カリマンタンからマレーシア・サラワク州へと木材が運ばれている。

密輸を行うもの、それを助けるもの、その密輸で儲けるもの、これが密輸を作る構造である。賃金の低い人へおこぼれ(賄賂)を掴ませ、密輸を手助けさせるのだ。このようなことが今もまかり通っている。**問題なのは、悪い奴を野放しにしていることだ。**それを支える企業、他の企業との連携を絶つことではないか。**悪事を働くものを孤立させるようにしていかねば、インドネシアでの密輸を停止させることは難しく、改革はないだろう。**

消費国である日本・・私たち購入するほうは、「まったく知らず買ってきた」が、知らなかって良かったのだろうか…。

手紙書きキャンペーン

インドネシアの紙製品～第３弾～

前回の第２弾では、ホームセンターのケーヨーがAPPのPAPER EXCELPROを取扱っている件について取り上げました。しかし、これまでのJATANの調査によって、APPやAPRILのPPC用紙を取扱っているホームセンターは、他にもたくさんあることが判明しています。

群馬県高崎市に本社を持つ株式会社カインズは、北関東を中心に宮城県から岡山県まで131店舗を展開しているホームセンターです。カインズの店頭では、APPのブランドであるPAPER EXCELPROと、JATANがAPPの製品であると確認しているカラーのPPC用紙のほか、パッケージに「PPC用紙」とだけ書かれメーカー名も生産国も記載されていない製品が販売されています。

JATANは今年２月、同社に手紙と報告書を送付してAPP社の環境や社会への影響について指摘し、製品の取り扱いを再検討するよう働きかけてきました。しかし、同社からの返事は得られず、現在でもAPPの製品の販売を続けています。

2005年３月期の売上では、カインズは業界１位です。業界大手として社会的にも責任と影響力を持つ会社と言えます。

カインズに業界トップとして、社会的責任を持った、環境に配慮した企業になってもらうために、APP社の製品の取り扱いについて真摯に再検討するよう、私たちからも手紙を書いて要望しましょう。

また、カインズ、ケーヨー以外にも、APPのPPC用紙を取扱っているホームセンターがたくさんあります（次ページ参照）。取り扱いを再検討して欲しいホームセンターに、同様の手紙を出して要望しましょう。

宛先：
〒370-0043
群馬県高崎市高関町380
株式会社カインズ
代表取締役社長　土屋裕雅 様

文案：

拝啓　貴社の店頭で販売されているAPP社のPPC用紙「PAPER EXCELPRO」について、要望いたします。

APP社はインドネシアのスマトラ島で森林伐採と紙パルプ生産を行なっている会社ですが、用いている原料の多くは天然の熱帯林を伐採したものです。ご存じの通り、熱帯林は生物多様性が高く、また森林の恵みに依存して暮らしている先住民族や地域住民がたくさんいます。スマトラ島には、スマトラゾウやスマトラトラなどの絶滅に瀕した野生動物も多く生息しています。

APP社による伐採は、森林内のすべての樹木を切り倒す「皆伐」という方法で、その生態系が完全に失われてしまう破壊的なものです。また、地域住民との対立や暴力事件も引き起こしています。

このような操業によって生産された製品を貴社が取り扱っていることは、残念でなりません。業界大手としての社会的責任の観点からも、APP社の製品の取り扱いについて、真摯に再検討していただくことを切にお願い申し上げます。

敬具

※文案を印刷した葉書を同封しましたが、独自の手紙を書かれるとより効果的です。

APPのPPC用紙を取扱っているその他のホームセンター

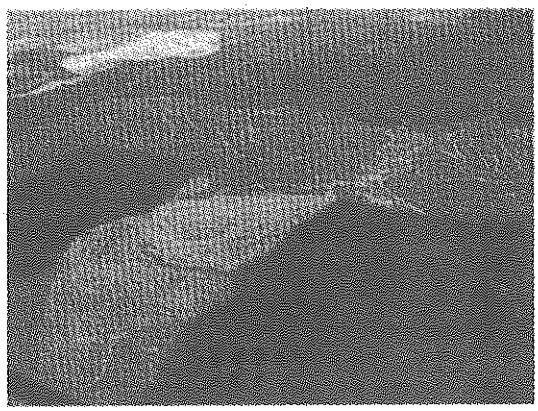
会社名	本社	主な展開地域	取扱い
(株)コメリ	〒950-1492 新潟県新潟市清水4501-1	北海道～山口県	APP、メーカー無記載
(株)島忠	〒331-8511 埼玉県さいたま市西区三橋5-1555	関東各都県	APP
ダイキ(株)	〒791-8022 愛媛県松山市美沢1-9-1	瀬戸内各県	APP
(株)東急ハンズ	〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-29-20	南関東、大阪府、愛知県等	APP、メーカー無記載
(株)ロフト	〒150-0042 東京都渋谷区宇田川町18番2号	北海道～広島県	APP
(株)セキチュー	〒370-1201 群馬県高崎市倉賀野町4531-1	関東各都県	APP、メーカー無記載
(株)ジュンテンドー	〒698-0002 島根県益田市下本郷町206番地5	中国・関西	APP
(株)くろがねや	〒400-0855 山梨県甲府市中小河原1-13-18	山梨県、神奈川県、東京都	APP
(株)ユザワヤ	〒144-8660 東京都大田区西蒲田8-23-5	南関東、大阪府、福岡県等	APP

※「メーカー無記載」は包装にメーカー名が無記載で、APPの可能性があるもの。

「パーム油は環境にやさしい」と言わないで～ライオンのCMに対して

国際環境NGO FoE Japan、地球・人間環境フォーラム、日本インドネシアNGOネットワーク(JANNI)など8団体13個人は、本日、ライオンに対し、「新トップ」のCMに関して「パーム油＝環境にやさしい」という誤解を消費者に与えるものとして、「パーム油を使用しているから環境にやさしい」という表現を改めること、パーム油の原産地情報、及び環境社会影響を公表することを求めた要請書を提出した(添付資料1)。

オイルパーム・プランテーションの急速な拡大は、東南アジアにおける森林減少の要因の一つとされており、大規模な森林生態系の転換、用地取得に伴う地元住民の権利の侵害、不適切な農薬の使用による水質・労働者の健康への影響、低賃金・危険作業等の労働問題などの環境・社会問題が生じている(添付資料2)。今回、要請を行った団体・個人は、これらの環境・社会問題が生産地において依然として生じていることを踏まえ、問題を解決するためには、選択的なパーム油の購入など消費側においての取り組みが重要であり、「本CMのように一概にパーム油は環境にやさしいとするメッセージは、こうした取り組みを阻害しかねない」ことを指摘している。



オイルパームのプランテーション(いずれもマレーシア)

パーム油は世界で生産量第2位の植物油であり、日本においても、マーガリン、即席麺やスナック菓子などの揚げ油、調理用油、洗剤、塗料、インク、化粧品などの原料として広く使われている。近年はバイオ燃料の原料としても有望視されている。

見解

1. 生産地における環境・社会影響に関する認識について

ライオンが、パーム油が有用な植物油脂であるとしながらも、生産地においては、熱帯林の伐採や野生生物の生息域の縮小、過酷な労働条件等の環境社会問題が生じていることについての認識を表明したことは評価する。

2. テレビCMについて

一般的に、植物原料は適切に使えば石油原料に比べてCO_2排出量削減効果があるとされているが(注1)、一方で、パーム油は、生産地において、森林生態系の急激な縮小その他の問題が生じている(4月7日付け要請文別紙参照)。CO_2の排出量削減効果は、環境問題の一側面をしか表していないことに重ねて注意を喚起したい。

また、ライオンが現在、パーム油の生産において重大な環境・社会影響が起こりうる可能性を認識しながら、そうした点に十分な説明が無いままに、「植物原料(パーム油)を使用しているから環境にやさしい」との表現で製品の宣伝をしていることは、ISO14020の原則などにも反しており(注2)、問題がある。とりわけ消費者への影響力の大きいテレビCMや新聞広告においてこのような表現を繰り返し使用することは、パーム油にまつわる環境・社会問題について消費者に誤った認識をもたらし、さらには生産地における乱開発を正当化するという点において、社会的責任が問われる問題と考える。

3. 原材料の確認について
ライオンが、今年3月27日、RSPO（Roundtable on Sustainable Palm Oil：持続可能なパーム油のための円卓会議）に参加したことは評価するが、RSPOへの参加のみをもって、現在ライオンが調達している原料の環境影響が回避されていることにはならない。ライオンがRSPOに参加している企業として、積極的にRSPOの持続可能なパーム油のための原則と基準（注3）を使用して原材料を確認することを希望する。

III. 結論
以上のような理由から、私たちは次の2点について、重ねてライオンに求めていくとともに対話を継続する。

1. ライオンが使用している原材料の生産地、及び生産に当たっての環境・社会影響を確認し、その結果を誤解が無いように十分に公表すること
2. CM等広告・宣伝の中で「植物原料だから環境にやさしい」という表現を使用しないこと（注4）

また、一方で、今後拡大が予測されるパーム油等植物油脂輸入に当たって、生産地における環境・社会影響を需要側においても配慮していくため、企業、行政、消費者団体、NGO等の関係者の間で具体的な検討・議論を進める必要がある点、関係者の注意を喚起したい。

以 上

（注1）一方でパーム油使用の温室効果ガス排出の寄与度を判断するためには、パームの収穫から消費までのCO2評価のみならず、熱帯林におけるカーボン・ストックとオイルパーム・プランテーションのカーボン・ストックとの比較、搾油・精製段階等での排水からのメタンガス発生の評価なども必要である。

（注2）企業による広告・宣伝もその対象に含まれる、ISO（国際標準化機構）の環境ラベル規格の一般原則5には「環境ラベル及び宣言の作成は、製品のライフサイクルにおける、関連する側面のすべてを考慮したものでなければならない」とされている。また、環境広告も適用範囲とするISO14021（タイプII環境ラベル規格）においては、「環境にやさしい」といったあいまいな環境主張はしてはならないとしている。公正取引委員会も同様の留意事項を述べている。

国際環境NGO FoE Japan／財団法人 地球・人間環境フォーラム／グリーンコンシューマー研究会／熱帯林行動ネットワーク（JATAN）／日本インドネシアNGOネットワーク（JANNI）／特定非営利活動法人 グリーンピース・ジャパン／ウータン・森と生活を考える会／特定非営利活動法人レインボー／グリーン・フォワード／NPO法人森の生活／グリーンコンシューマー東京ネット/日本消費者連盟

（個人としての賛同）泊 みゆき（NPO法人バイオマス産業社会ネットワーク理事長）／堀口 俊彦／岡本 功／吉井寛之／横山季若／奈須憲一郎（北海道地球温暖化防止活動推進員）／坪井 猛／岡田久典／高橋 漠／能登ひとみ／村田 佳壽子（日本環境ジャーナリストの会 理事）／岩井 尚人（環境カウンセラー、北海道地球温暖化防止活動推進員）／岡崎 朱実／坂川 資樹／佐藤 忠幸／千葉精一／油津 雄夫／牧村 佳代
（12団体、18個人）

ライオン「新トップ」のCMに関する要請書を提出（2006.4.7）

● この件に関する問い合わせは下記まで。
国際環境NGO FoE Japan Tel:03-3951-1081 中澤健一
地球・人間環境フォーラム Tel:03-3592-9735 満田夏花（みつた・かんな）

http://www.foejapan.org/forest/doc/060407.html

ボルネオ島を行く⑰

原生林と先住民らの薬草を探して

最終回(14)ー村で演説をする　東 悪男

《森は川を守る。太陽が全てを育む》

今から約3年前、2003年12月31日。

今朝は特に眩しい。森の中で寝たせいだろう。

原生林の中でいたから、衣服は泥がつき汗まみれで、臭かった。ラッキーにも外を見れば快晴だった。洗濯、洗濯。

ドグは疲れていたのだろう。朝7時を廻っても起きてこない。私の横で寝ていたK氏は、眼を擦って夏用のシュラフを畳みだす。

私は大きめのビニール袋を持って、川で洗濯に行く。昨日、豪雨が降ったのに、この村の川は澄んでいた。2日目に水浴びした時と同じだった。

K氏もやって来て、2人とも洗濯。マンディ(水浴び)。冷たいが心地よい。

「ここもそうだが、原生林を伐採されずにいる所は、多少の雨でも川は直ぐきれいな水になる。しかし、伐採されたところは茶色の泥水だ。

以前、キナバタンガン川下流のスカウに行っただろう。サバでは伐採が早くからされて、森林破壊がひどい。泥水だった。サラワク州も各地で伐採がされて、飲めないような水になっている」

と、ガイドK氏は言う。

洗濯物を干し終わって、ドグらが住むロング・ハウス(長屋)に戻れば、朝食が用意されていた。

ドグも起きてきて、コーヒーとビスケットを食べる。食事は、子どもと男たちだけ。そこへドグの一番下の弟がバブィ(野豚)を持ってきた。

「今朝、2頭仕留めたんだ。」

エドが山刀でバブィを切って、女性たちが一部をスープに、そして大半を焼き始めた。今朝は豪華な食膳になった。祈りの後、ガイドKやエドの叔父、ドグなどは、黙々と食べている。

私はカメラを取り出し、食事の様を写す。

「ジャン(美味い)。クマン(食べろ)、クマン。フォトNo！」とK氏。無茶苦茶な英語になっている。

「女性は食べないの？」と聞けば、「プナンも同じ、女性は後から食べる」と、ドグが言う。

村長もやってきた。食事を終えていたというのだが、また食べている。豚を1片食べ、彼は言う。

「この辺りは、森がいっぱいあるから川もきれいだ。だから獲物は美味しい。森が川を守り、川が森を守る。太陽は森を、みんなを育む。」

《先住民の手で奥地の診療所建設を》

昼からはカメラのレンズが曇っていたので乾す。なかなか乾かないので、村を廻ることにした。

「ここの家の前に建て始めているのが、簡易診療所。と言ってもお金がないから、いつ出来るか分からない。村長らに聞けば、先住民が造る診療所ができるなら奥地で最初だ。他の所で怪我した人も診療したいと。自然の薬草と現代医薬を使いたい。多くのお金や海外からのファンド(基金)があれば、建設に努力するんだが、、。

学校も老朽化して、改善が必要」とK氏。

暑いが、K氏と2人で散歩。

よく見れば、ドグ、エドらのロング・ハウスはこの村で1軒だけだった。他は個人の各家になっている。移動プナン以外の他のプナン村や他の先住民の家は、ほとんどが全員寝られる巨大なロング・

ハウス。だが、ここは違うらしい。

定住プナンもいるが、まだ森を移動する移住プナン人もいる。しかし、森が壊され、棲家をなくし、定住を強要されたプナン人が多い。

聞けばこのプナン村は、100年以上前に、自ら定住したのだそうだ。

あちこちの家を訪問したら、どこでも「クマン(たべろ)、クマン」と、野豚やちまきのようなものを出してくれた。お腹一杯になり、ドグの家に戻る。

ドグは家の中でいて、村長らと話したようだ。

「今晩、教会でまた儀式がある。来ないか。最後の夜になるのだろう」と、私たちに告げた。

「OK。ありがとう。昼寝だ」と、K氏は変な答。

私は、ドグの一番弟である牧師がロング・ハウスで子どもたちに散髪していたのを見て、見学。

「みごとだ」と私が言うと、「今度はあなただ」といわれて、散髪されることになった。

「これがプナン・カットか」とみんなと爆笑する。

こ

とうとう最後の夜になった。

約1週間居た外国人は初めてだそうだ。夕食後、K氏、ドグ、エド、彼の父親などと日が沈んで、古いほうの教会へ行く。

牧師の挨拶の後、村長や長老たちが長い演説や朗読をする。寝ている乳飲み子を抱えた親も。言葉は判らないが、疲れていたからか気持ちよい。

ドグの叔父がまず演説を始める。そして村長。その後に牧師が、今年の村の問題、新年に迎える言葉をとうとうと述べる。約1時間ほど。居眠りをする老人、子どもたちもいる。突然、ざわめいた。

横にいたドグが言う。

「いましゃべっている父の挨拶の後は、あなたの番だ。森や村のことを話してほしいと言っている。」

たじろいた。

ただの訪問者なのだ。なぜ、私がしゃべらねばならないのだろうか。好きで奥の村、奥地の守れれている原生林を見たいといって来ただけだが。

K氏は「通訳するから」と教団壇上へ引っ張る。

考えていない所でスピーチはしんどい。困った。

K氏らに壇上近くまで連れられたら、仕方ない。演説をすることを決めた。

「エー、私の名前は東と言います。日本から来ました。多くのサラワクを廻りました。ガイドKさんの紹介でこの村に来れて感謝します。

短い間でしたが、素晴らしい森を見ました。ここから連なる原生林は美しく、アジアNo1です。多くの人たちが森を守る努力をされて、この森が保全されていると思います。

今、建て始めている先住民初の診療所や新しい小学校の建設にお役が立つときは、この素晴らしい村にまた寄りたいと思います。」

みんなと握手。ガイドKも眼に涙を浮かべている。K氏とドグと3人で再度、握手する。12 時をまわった夜空の星はまばゆいばかり美しい。

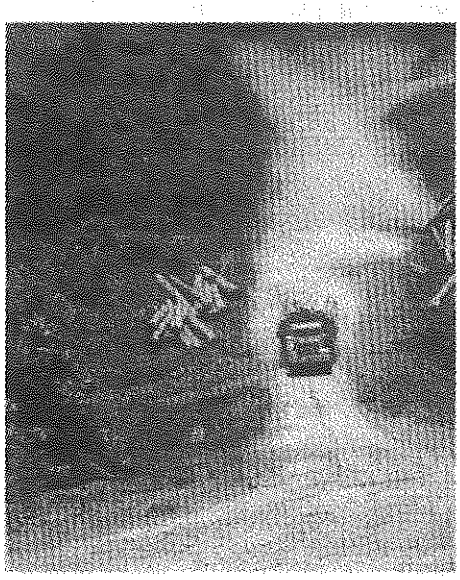
朝日が昇らない3時半。

起床。すぐ仕度だ。

この村のNo2のドグの父もやって来て握手。私はみんなに少しだけプレゼントを渡した。

老父は「ダワイ・ラカオ(遠くへ行く人、さようなら)」と一言。

私は彼の手を強く、力一杯握りしめた。



原生林伐採して、サムリン Timber へ木材を運ぶトラック

【後日談・付録・・村の自立経済と診療所計画】

2005 年 3 月、再度、ドグの村へ行く。ミリ市からいつものようにジェットコースターのような林道を通って。迎えてくれたのはエドだ。

ドグとその日の夕方に再開する。いつものように New Hotel(野菜等の出作り用の家)で作業をして、疲れていたらしく彼は寝ていた。

私は町から運んできたコーヒーを出し、3 人で最近の村のことを話す。聞けば、診療所の計画はあまり進んでいない。村長や叔父、K 氏らが中心にプランニングしているそうだ。

翌日、村に入る。

多くの人々が待ち受けてくれた。ガイド K 氏は明日到着だ。村長らと話する。

「診療所はほしいが費用がない。力を貸してほしいのだが、、、。」と、村長が言う。

「どんな計画になっているのか」と聞く。

「青写真はあるのだが、、、。」

どうも進んでいないようだ。

「明日、K 氏を交えて話そう」と私は伝えた。

翌日の午後4時ごろ、K氏はガイドとしてやって来た。外国人の世話をしながら歩いてきたので、今回も疲れたようだった。私は、彼が一眠りして、夕食が出来てから話すことにした。

いつもどおりの野豚と野菜のおかず。狩猟でみんなが豚やその他の動物を捕れないときは、どんな風になるのか、と尋ねる。

ドグが言う。

「いつもどおりさ。動物が好む果実や野菜が出来ていない時、彼らは村の近くにやってこない。原生林の樹木の果実を食べる。反対に原生林でいつも果実や実がならないことも多いので、村の周りに動物がやってきて、私たちは狩猟する。

狩猟する道具は、吹き矢か最近ある人は銃で仕留める。この村は吹き矢で仕留めている。

動物を仕留められない日もあるが、1 週間に1頭か 2 頭を、この村の誰かが捕獲し、野豚を取った人が親戚を中心に分ける。1 日に何頭も村人が取った場合は、大半が個人、家族で分けて、燻製状にして 2－3 日保存できるようにする。」

K 氏が補足して説明する。

「これはプナン人だけでなく、サラワク先住民の慣習のようなものだ。慣習といえば、定住プナンも含めサラワクの先住民は慣習地で、野菜を作り、果実を取ったり、そして原生林でもハンテイングする。サラワクの大半の原生林を先住民が利用している。

しかし、1970 年以降、先住民が使用している原生林が急激に破壊されだした。先住民は、なぜ伐採企業が自分の利用・使用地に入ってきているのか、当初理解できなかった。原生林を使用していたのに、州政府は先住民の知らないうちに木材企業に原生林の伐採権を発給していたのだ。自分たちの森が壊されていったので、多くの先住民が多くの地で道路封鎖した。

そして今は、多くの先住民は狩猟も出来ず、薬草も果実もなくなり、村が健康的で、自立できる経済を奪われてしまった。特にひどいのは、村で野菜や穀物を作っている慣習地を、州政府が企業に伐採権を発給したり、アブラヤシ開発用地にしてしまうケースだ。このことを友人の弁護士から聞いた。

私は詳しい法律を知らないが、1990 年前に道路封鎖したら逮捕・罰金となったらしいが、大半の住民は知らない。伐採権発給や法律改正を知らすのは、州政府が管轄する大都市だ。それもわずかの間だけ。多くの先住民は、遠方の都会まで出て行けない。そんな費用やお金がない。大半の住民が州政府の法令や森林法、土地法、それらの改悪を知らない、知ることが100%困難だ。

しかし伐採企業は、州政府と関係を持っているので、大半を知ることが出来る。そして、彼らは原生林を次々破壊し、巨万の富を得た。例えばこの辺りの原生林を破壊し続けているサムリン Timber は各地に子会社がある。日本にも作ると聞いた。そのほかリンブナン・ヒジャウ社はブラジル、ロシア、パプア・ニューギニアでも伐採している。」

彼、K 氏は都会でインターネットしているので情報を得ていると、みんなに説明する。彼は言う。

「村で利用や使用している森がなくなり、村の経済が狂えば、そこの人々は生活に困窮する。特に若者や男性は、村に仕送りもしなければならず、都市へ出て働くことになる。それでも村の経済は上手く成り立たない。村はなんとか維持できても、経済的にも社会的にも自立できない。村に川や山や、畑も減り、収入もなくなり、魅力もないようになれば、若者たちは村に戻ってこない。そうなれば村は滅び、先住民の暮らしは全て狂ってしまう。

しかし、この村は違う。若者が町へ働きに出ても、大半が戻ってくる。村の社会が自立出来ているからで、村が魅力あるからだろう。例えば連なる原生林がすばらしい。

私の村は原生林がかなり残っているが、このように村の経済が自立していない。うらやましい」と。

K 氏はほとんど英語でしゃべったので、ドグがプナン語でみんなに通訳する。

今度はドグが話す。

「わかった。私も村からほとんど出ない人間の 1 人。エドは村から 1 度も町へ行ったこともない。半数の若者が町へ行かない。でも村も十分に暮らせる。仕事に束縛されない。時間は自由。何でも出来る。だから町に働きに出ても、すぐに戻ってくる。K 氏のガイド補佐に働いたルイスも 1 年でこの村に戻っただろう。

この村が自立できているし、魅力あるから、1 つの事例として奥地のプナン人村に診療所を作ろうとしている。このことを、村長や K 氏が中心にプランしているので、話してほしい」と。

「この村も含めて近くの村もこの周辺は、いっぱい素晴らしい森がある。動物もいっぱいいる。薬草も 1000 種以上がある。この周りの村がこぞって道路建設や森林伐採に強く反対したので、サムリン Timber 社は今、この辺りで伐採をやめた。だから今、多くのプナンやその他の先住民が利用してもらえる診療所をこの地に建設したいのだ。

しかし、村にお金がない。診療施設も建設できない。木材はいっぱいあるが、他の物がない。

医者は年に 4 回診療に来てくれる。医師たちは何箇所かの村を決めて、診療に廻ってきてくれる。私たちで解決できない病気もあり、循環の診療は大好評だ。しかし私たちで治せる薬草を利用して、簡易診療所を造りたい」と村長が説明する。

K 氏が加える。

「1 つの村に簡易診療所が出来れば、それが見本となって、他の村に暮らす先住民の価値観が変わる。私たちも自立できるような社会にしようと。

しかし細かいプランはない。そこは村でもっと考えてほしい」と。

私は「素晴らしいが計画倒れになると無に帰すので、今度プランを深めてほしい」と進捗していない計画に、支援を一時停止したいと K 氏を通じて伝えた。もし青写真が完成したら応援すると。

奥地の先住民で作る計画は進まないと判明した。長期の計画があまりないからかもしれない。私は今後、この村がどのような診療所計画を練り上げるのか、期待したい。プランがある程度できたら、多くの人にも支援を設けたい。しかし今は STOP。

今後が楽しみだ。この村やほかの村を見ながら、奥地の村が自立できる基盤を拡大できることに何らか協力できたら、、と今思う。

【終わり】――長らく読んで(?)いただきありがとうございました。　（西岡良夫こと別名　東悪男）

世界の森林ニュース

2006年3—6月　　（ｂｙ/西岡）

【サバ州，大規模伐採禁止打ち出す】

4月4日，マレーシア・サバ州政府は07年末までに大規模な森林伐採停止し、持続可能な森林管理に移行と発表。残された原生林等にオラン・ウータン、スマトラサイ、ゾウが生息し，WWF、JATAN，ウータン等はこの措置を歓迎。だが違法貿易は続く。（スター紙）

【中国政府、違法貿易に取り組んでいると】

3月29日人民網日本語版によると、中国外交部秦報道官は「中国は一貫して違法伐採に反対し、違法の木材等取り締まっている」と。

【中国企業、パプア密輸材関連に巨額融資】

インドネシア・西パプア州で、違法伐採が続くメルバウ材の取引するため、中国企業は10億ドルの加工工場建設を申請。北京オリンピック用にメルバウを最低80万ｍ３使用と。
(Jakarta Post4/29 & Forest Org News)

【NGO、違法メルバウのEU市場停止求む】

インドネシアTelapakと英米NGOのEIAは、「パプアのメルバウ等違法材は中国だけでなく、欧米市場に大量販売。欧米の大手企業は持続可能な森林からのメルバウを調達としているが、消費者は騙されている」と指摘。（『Behind the Veneer』4月）

【インドネ、天然林利用停止！ 違法船罰則】

4月インドネシア林業省事務局長は、「2014年以降に木材産業による天然林材利用を全面停止と。2009年にパルプ製紙用の天然林材の供給制限し、段階的に植林材に転換」と表明。また商業，工業，林業各相の決議で違法材の積載船に罰則と公表。(4/15,4/28 Kompas)

【インドネシアと米国、違法材対策等話合い】

4月4日、米通商代表部は「インドネシアとアメリカが違法伐採及び絶滅危惧種の違法取引に対処の協定を結ぶよう公約」と声明の文を発表。（フェアウッドニュースより）

【インドネ、サラワク国境に巨大開発計画】

インドネシアNGO・WALHIからの連絡で「今年1月からインドネシア政府は、同国カリマンタンとサラワク国境の原生林が大半の山岳地10Km幅以上で、巨大なアブラヤシ開発を計画し、キャンペーンを始めたい」と。（詳細は『Kalimantan Maga Development Plan』英文60頁強か、ＷＡＬＨＩのＨＰ）

【ベトナム首相、森林違法利用に罰則発表】

3月20日、ファン・カイ首相は保護林の伐採・火入れを許可した市民等へ罰則を命令。違法利用を止める取組みと表明。だがメルバウはベトナムにも大量輸入とTelapak指摘。（フェアウッドニュースとTelapakのメール）

【各業界、違法材排除のＧ購入法対処へ】

4月から実施のグリーン購入法改正で合法材のみを使用条件とすることに対処するため、各業界が動き出した。3月16日、**日本合板工業組合連合会**は団体認定制度を導入と。3月31日、**木材表示推進協議会**は原産地、樹種名など自主表示を改訂し、合法性関連の記載含めると。4月1日、**全国木材連合会**は都道府県レベルの会員企業を団体認定にすると。4月4日、**日本プリントカラー合板工業組合**も団体認定制度実施の[合法性を証明に係る事業者認定実施要綱]を定めると。4月14日、**日本フローリング協議会**は合法性証明に取組むと決定。3月に合法性証明の団体認定にすることを表明していた**日本木材輸入協会**は5月20日、違法材対策として行動規範等を公表し、会員に周知徹底させると。また**同協会**と**極東木材輸出協会**は5月11日、ロシアで日本へ輸入のロシア材の合法性を管理するため極東輸出協会が森林認証や生産・加工等の認証の取得に努め、2010年に全て木材の合法性証明を目指すと。だが4月ウータン調査で、[密輸材大半のラミンの製品がグリーン購入適合品とし販売]される!!なぜ？メルバウも問題だが。（日刊木材新聞3月31-5月26各紙面等）

ウータンへのお便りから・・・・

≪会費、カンパを頂いた方々≫（2006年4月14日～2006年6月15日）　（敬称略）
橋本征二　本田次男　水田哲生　宮澤朔子

（ありがとうございました）

≪おたよりから≫　（敬称略）
☆毎年書いていますが、継続は力、ですね。　（5/19）水田哲生

Book紹介！

村下祥子

●『熱帯雨林からヤッホー！』八束澄子（やつかすみこ）　新日本出版社
2000年　1400＋税

サラワク州のランビル国立公園。亡くなった研究者井上民治さんの研究を紹介しながら、ワクワク森林体験をかたる。児童むけだが大人が読んでも一斉開花の秘密など、よみごたえがある。

●写真絵本『オランウータンの森』

鈴木南水子・文　鈴木晃・写真　国土社　1800円＋税

オランウータンが何を食べ、どのように子育てし、親子の生活をいとなんでいくか、その暮らしぶりと熱帯雨林の大切さを、20年間オランウータンを追い続けた研究者のとらえた写真でつづる。（カバーより）
鈴木氏は「日本・インドネシア・オランウータン保護調査委員会」代表
子どもの表情が「なんともかわいい。

●『マンションの中に世界でたった1つの木の家（エコ・ハウス）を建てる』麻生木綿子（あそうゆうこ）　飛鳥新社　1500＋税

扉の写真をみて、「新築マンションに木の香りのする快適な空間をつくりました」という解説そのままの、あかるい、国産材の部屋に驚く。具体的な作業のこと、建築士さんとのやりとり、費用など、実際の体験を読みやすく書いてある。（ただし、2000年の出版なので、価格は変わっているだろう）

文：永戸豊野

Red Data Animals

ボルネオオランウータン

2004 Red List:
EN / 絶滅危惧種

ごく最近、八つの環境NGOが、テレビで流されているある洗剤メーカーの「環境にやさしい植物原料の洗剤」というコマーシャルに強い懸念を表明した。

この植物原料がアブラヤシの油（パームオイル）であるならば、植林から油製造に至る過程に、未解決の環境・社会問題が残されており、現状では「パームオイル＝環境にやさしい」とはいいきれないのではないか。これが懸念を生んだ事情だ。

ここでいう環境・社会問題のなかに、アブラヤシのプランテーション造成のため、大規模に行なわれた熱帯雨林の伐採と、その影響があることは疑う余地がない。

ボルネオオランウータンのオランウータンとは「森の人」を意味する。オランウータンは森林、主として熱帯雨林に生息する樹上生活者で、好んで野生のイチジクやドリアンなど果実を食べている。オランウータンは熱帯雨林の自然に適応して生きてきた典型的な動物なのである。

ボルネオ島の大半を覆っていた熱帯雨林の大がかりな伐採は、20世紀後半の移住政策の実現（移住民の受け入れ）と、アブラヤシ・プランテーションとパーム・オイルの生産計画の推進によるが、その進行に伴って、オランウータンは当然、急速に減った。1970年代から頻発するようになった大きな森林火災も、減少の一因となっている。例えば1983年のそれは36,000平方キロの森林（全島面積の5%）を焼いた。アブラヤシのプランテーション造成のために行なう違法の火入れによる森林火災もあったといわれる。現在のボルネオオランウータンの推定個体数は10,200～15,500頭。他に約38,600頭という説もある。

分類：霊長目 ヒト科 オランウータン属
学名：*Pongo pygmaeus*
英名：Orang-utan
分布：インドネシア（ボルネオ島：カリマンタン）、マレーシア（ボルネオ島：サワラク、サバ）、ブルネイ？

レッドリスト

IUCN（国際自然保護連合）が1966年から刊行している、世界の絶滅の恐れのある野生生物種のリスト。正式名称は「IUCN Red List of Threatened Species」で通称レッドリストと呼ばれる。リストは哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、昆虫などの脊椎動物を網羅しており、2004年版のレッドリストには、7,180種の動物が「絶滅の恐れが高い種」として掲載されている。

レッドリストのカテゴリー

絶滅種	（EX）	絶滅が確認された
野生絶滅種	（EW）	野生では絶滅した
絶滅寸前種	（CR）	絶滅寸前の状態にある
絶滅危惧種	（EN）	絶滅する恐れが非常に高い
危急種	（VU）	絶滅の恐れが高い

＊野生絶滅種とは、飼育下で生存している種と、野生に一部遺された種が含まれる。また、この他にも「準危急種」「絶滅個体群・亜種」「情報不足種」「未評価種」などのカテゴリーがある。

◀ WWF 2006.6 No.350 より

ウータン・森と生活を考える会

【OFFICE】〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36
サクラビル新館308
「関西市民連合」気付
Tel.06-6372-1561
(HPwww.hutang.org/(mail) fwpc3808@mb.infoweb.ne.jp

【一部】300円【年会費】4000円
【郵便振替】00930-4-3880

◉購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。
◉ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。

PRINTED ON RECYCLED PAPER